

『リキッド・モダニティ 液状化する社会』

序文 軽量で液体的であること

第1章 解放

■担当部分の要約■

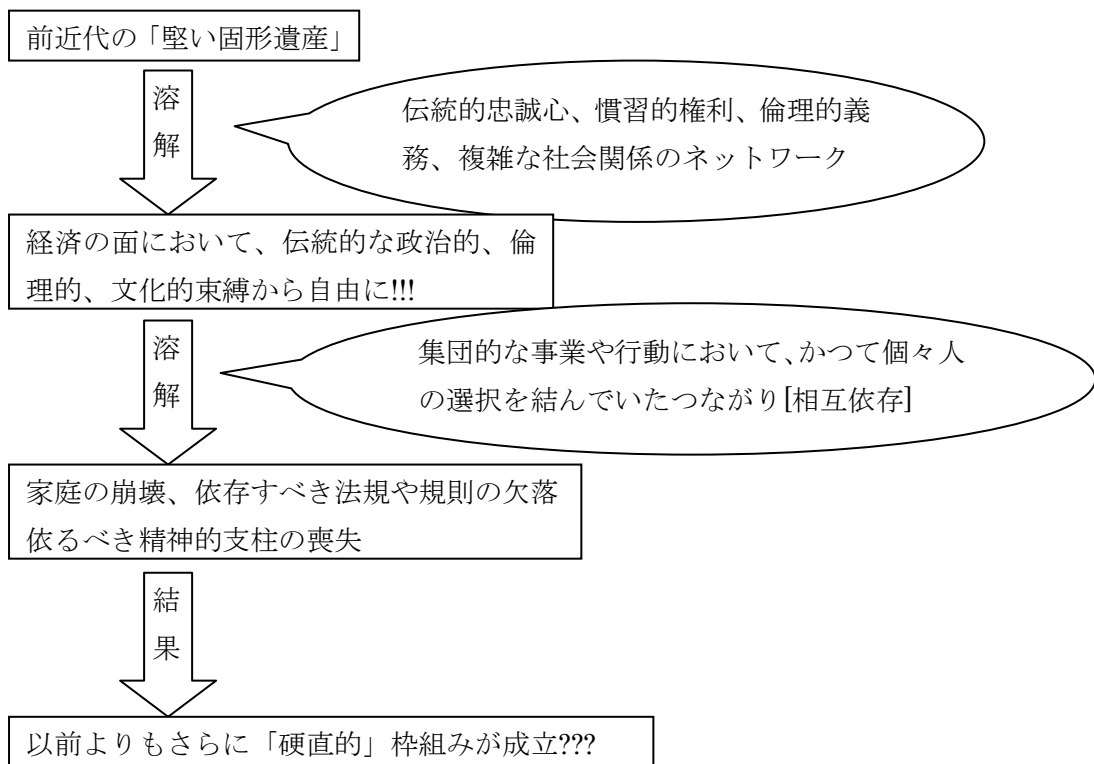
序文 -軽量で液体的であること-

流体の特徴

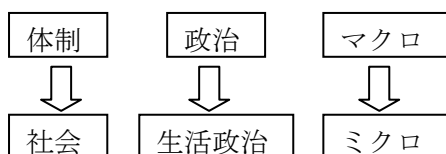
- ・ 時間 -形をとどめておくことができない
- ・ 柔軟性(可動性) -容易に早く動ける

→近代は「液状化」、「流動的」のプロセスではないか???

○液状化の流れ



○液状化のまとめ



- ・ 全責任が個人にのしかかってくる。

・「液状化」の過程においては、常に状況が変化し、食い止めることは困難

○「近代以前」→「近代」→(ポスト近代)への簡単な流れ

近代以前

空間=時間、個人にかかる大きな責任

近代→現代

時間が空間を征服、権力行使が容易に→逃避、流出、省略、回避
 グローバリゼーションへ[→論点①]

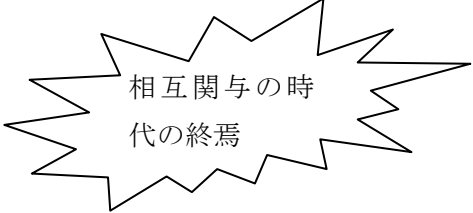
支配される側に、
 支配される。

例① パノプティコン[監獄]

[近代以前] 囚人を支配する側も、常に監獄にいる必要があり、責任が生じる。

[近代] 不在地主。誰でもどこでも権力行使が可能。

権力は空間に縛られな
 い、超領域的なものに。



例② 戦争の形態

近代以前	地上戦	ベトナム戦争まで
近代	空爆	湾岸戦争、ユーゴ戦争
現代	無人爆撃機	アフガン戦争、イラク戦争
ポスト近代	2次元???	

米本土から遠隔操作。ゲーム感覚。

戦争の目的[これがあてはまるのはアメリカのみ???]

領土や利権、獲得したあとは利用



流動的世界権力の流れを邪魔する壁(旧権力)の破壊(のみ)

領土権の重要性の低下



新自由主義、自由貿易市場主義の席卷

「名著」「名曲」は戦争を背景にしたものが多い。→人の命の重みを常に考えてきたのでは???

戦争の手段の変化

人を殺害する重み、人を失う重みが軽減。

人間が手段達成のために「コマ」化。

○まとめと問いかけ

現代は、

- ・今まで縛られてきた束縛から効果的に逃れること(脱責任)
- ・グローバル化の進行

が進む一面、

- ・主に第3世界による、液状化への抵抗
(後半部分は大槻の私見。論点①で)

の流れもおきており、これから起こりうる時代なのでは???

新たな形態をとることで、近代以前にあった概念は復活可能なのか、またどのような形態が理想なのかを、以下の5つのトピックに関して本書では論じるというながれ

「解放」「個人」「時間/空間」「仕事」「共同体」

第1章

ヘルベルト・マルクーゼ(独→WWII時に米に亡命)

(大衆は望まないが)豊かで、強力で、機能的欠陥のない社会から解放されねばならない。
←解放「後」に得られる「自由」を人々が想像できないにもかかわらず。

束縛を感じることなく、自らの意思にもとづいた行動が自由にできると感じるには、
欲求と、**想像力**と、**行動の可能性**の三者のあいだに、平衡がとれていなければならない。
平衡を満たすためには、以下の2点を満たす必要がある。

- ①欲求と想像力、または、欲求か想像力の抑圧
- ②行動の可能性の拡大

→要素として問題になってくるのが、

- ・「主観的」「客観的」自由の解釈
- ・主観的、客観的「解放の必要性」

自由であるかのように
感じられている不自由

「客観的」自由を経験し、獲得するモチベー
ションの低さ(現状の「不自由」で満足)

自由は祝福か呪いか

近代は、「解放」を政治改革の第1課題とし、「自由」に最高の価値を付与したが、**自由は容易に獲得されず、それを謳歌すべき人間にも歓迎されなかった。**

理由として、

- ①「一般人」は自由を受け入れる段階まで達しなかった。

マルクーゼ

不自由な人間の不自由との妥協の原因として「中産階級化」「大衆文化」などの新しい豊かさ(日本の状況と一致)**[→論点③]**

②自由によってもたらされるであろう恩恵に、多くの人々が疑念を抱いた。

個人的資質に「任せられ」たとき、リスクや失敗に対する恐怖の発生

ホッブズ

「解き放たれたときの人間」にたいする本能的な恐怖

社会的抑圧から解放された人間は、自由な個人ではなく獣である。

参考① 南北戦争後の南部の状況 『風と共に去りぬ』より

解放された黒人奴隷の状況

参考② アパルトヘイト廃止後の、南アフリカの急激な治安の悪化

エミール・デュルケーム(仏)

奴隷状態から人間を真に解放するのは、厳格な罰則規定に支えられた規則

→反復やルーチンを課すからこそ、みずからの進むべき道を知ることができる。最も恐ろしいのは、**混沌(アノミー)**

アンソニー・ギデンズ(英 ブレア政権時の「第三の道」提唱者)

社会的仕組み、社会的自己理解において、**習慣性**が重大な意味を持っていることを指摘。

しかし、「個人」が自由を獲得してしまった今、**もはや過去への回帰は困難**。

これから先の共同体は、個人主義にもとづいた、はかない創作品にしかならないかも。

批判の盛衰

アンソニー・ギデンズ

自由な個人からなる現代社会において、現実批判と現状への不満の表出が、構成員にとって不可避の行動となり、日常的義務とさえなっている。

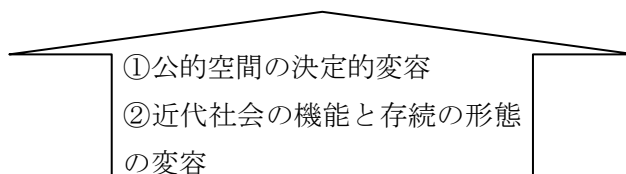
←確かにわれわれは自らの生活を「内省」するが、それは機能せず、無力である。

現代社会の特徴

批判を内部に取り込むことができ、またその結果如何にせよ、影響を受けない。

例：キャンプ場

利用者がどれだけ文句を言っても、結局はキャンプ場自体の運営は全く変わらない。



古典的批判理論が対象としていた社会の特徴

重厚、個体的、凝縮的、体系的→全体主義的傾向

制度化された規範、慣習化した基準、義務の割り当て、行動の管理と、健全な経験的
理性による批判意識が組み込まれた社会

マックス・ウェーバーが提唱した「近代官僚制」←命令と規則

批判理論の目的

人間の自立、選択と自己主張の自由、独自性とその継続の擁護

個人的自由が日常的反復から解放されること

全体主義、均質主義、均一主義的社会のしほりから放出されること

※変則性の撲滅のために、主として個人の自由と自立が犠牲に

現代社会の特徴②

永遠に未完成の、衝動的、強迫観念的、**連続的近代化作業**

創造的破壊への際限ない、抑制のきかない渴望

盲目的信仰からの脱却による存在の「自立」→無限の可能性

↓

充足感は現時点では決して訪れず、真の満足は可能性としてのみ未来に譲られる。

現代社会の独自性

①「初期近代の幻想が、衰退していったこと。

—進歩に終りがあり、歴史に目標があり、公正で平和な社会が形成され、完全な
秩序が到来し、偶発性は消えるだろうという幻想

② 近代化の目標の義務が、規制緩和され、民営化されたこと。

進歩の主な担い手：社会→個人

倫理的政治的言説：「公正な社会」建設→「人権」

→進歩の期待が、政府ではなく個人負担に。いわば、責任を押し付けられた形に。

マーガレット・サッチャー(元英首相)

社会などというものは存在しない。(→小さな政府への世界的流れ)

市民と戦う個人

ノルベルト・エリアス(独→英 ギデンズの師)

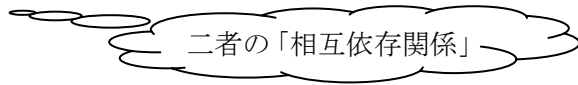
著書『個人の社会』

近代社会：構成員に個人としての形態を与えるもの

×社会と個人が自由と支配権をめぐり、対立するという構図



○社会が構成員の個人的性格を形成し、逆に、社会依存のなかで発生する個人的生活習慣が社会を形成する。



ウルリッヒ・ベック(独 ギデンズと共著もあり)

個人化は、**はっきりした目標のない、終わることのない未完成のプロセス**

さらに「個人化」により、個々人がアイデンティティを獲得しなければならないという責任も発生。

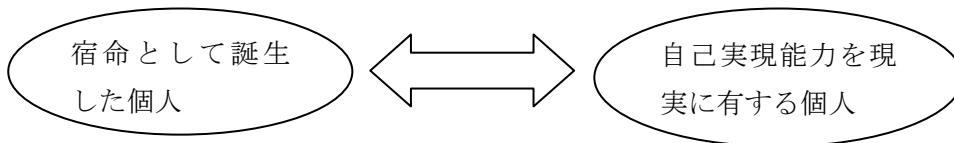
近代の到来により、身分の他律的決定の時代は去り、衝動的、強制的自己決定の時代に。

世襲身分 → 実力による階級

しかし、階級制度は、それぞれの構成員をしぼりつけ、流動的なものにはならなかった。

個人化は「宿命」であり、「選択」の余地は残されない!!!

←社会は危険と矛盾を生産しつつける一方、それらの対処は個人に押しつける。



真の自己形成は、個人化した人間の自己実現能力以上のものを必要とする。

かつては集結やデモが問題解決の手段として認識。

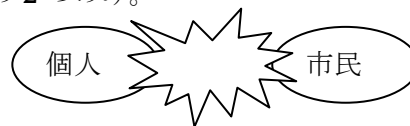
しかし、市民→個人の流れが進む近代、他者は諸問題の最終的解決に力をかけてくれないことを学ぶ。

ド・トクヴィル(仏 フランスが誇る歴史家)

人間の自由開放は、人間を**無関心**にする。**個人は、市民の最大の敵。**

個人が「公権力」に期待することは、以下の2つのみ。

- ① 「基本的人権」の確保
- ② 自己実現ができる治安の確保



○まとめ

個人形成の背後で、市民性が浸食されている。

個人的関心や興味だけが公的空間を占領。

「共同でものごとを決定する能力」の復活、集団的に挑戦する重要性。【→論点②】

リチャード・セネット

現代社会では**個人同士の私的親密さ**が貴重とされ、それが「共同体建設」の唯一の

よりどころとなるが、それは所詮 **もろくてはかない共同体** である。

個人社会における批判理論の苦悩



形式上の個人	事実上の個人
不幸を誰のせいにもできない。 挫折を自らの怠惰以外のせいにはできない。 救済手段を努力以外に見いだせない。 社会に「はけ口」を求める。	運命を自ら決定し、真の選択ができる。

現在の権力

町や市場、集会所や議会、地方政府や中央政府をはるかに超え、コンピューターネットワークという非領域的領域へ移った。

戦略的鉄則は **逃避、回避、不介入、不可視性**。

批判理論の変遷

個人的自立を「公共領域」の侵攻から守ること。

↓

公共領域を防御すること。空になりつつある公共空間を改装し、人を呼び戻すこと。
 ←人間は個人の枠をこえたもの、個人的能力をこえたものに、さしせまった重要性を認めなくなった。(以前は、1 市民としてそれらに従って行動していた。)

新たな課題

個人化と、権力と政治の遊離によって破壊されたものを復元すること。

形式上の個人と、事実上の個人の接着。

批判理論再訪

思考に関して

アドルノ

思考へのさしせまった欲求がわれわれを思考させる。

また、思考とはいくら正当化しようとしても、正当化できるものではない。

→思考へのさしせまった欲求が特権に変えられた。

洞察	無邪気
自由への第一歩 解放の展望をひらく 思考する自由	洞察によって邪魔されない限り、安泰 激動や危険な状況も、安全な平素の状態に

絶対的孤高	
-------	--

哲学と政治

ウパニシャッド哲学は、政治性が皆無。統治や集団性よりも、思想と個人性を重視。

→後々出てきた、「実戦的」思想にとってかわられる。

アドルノ

古代宗教、古代哲学は、結局は**現実への関与と思想の支配**の概念を含まなければ、生き残れなかった。

→実践性は必然的に支配欲に変わる。

←実践を拒絶しても、結局のところ思想は無益で不毛なものに。



レオ・シュトラウス

アレクサンドル・コジェヴ

永遠不変の秩序の普遍的受容は、純粋な知識と叡智のもとで成立するのであり、**意見の調整と妥協を通して成立するのではない。**

政治的関与 or 政治からの完全撤退

シュトラウス

権力者と哲学の目的のあいだには関係性は存在しない。

コジェヴ

歴史には影響されないが、歴史を無視できない。

哲学の真実性は、それが**受け入れられ、認知されたかどうか**によって決定される。

認知は哲学の最終目標であり、真実性の証明である。

世界と接触するために、国家は成立初期の段階において専制的体制をとらざるをえない。

国家に協力するか、抵抗するかは近代の創成期的ジレンマ。

生活政治批判

生活の「個人主義化」の幕開けのなかで、さまざまな課題が浮かびあがってきている。

- ・形式上の個人と事実上の個人のあいだのギャップ
- ・法的に強制された「否定的自由」と、希少な「肯定的自由」のギャップ

自由人のもつ矛盾

○アイデンティティ

堅固さを持つ必要がある一方、激しく変化する環境に順応して変化する柔軟性

○人間同士の協力

期待が大きい反面、制度化されておらず、責任に耐えることができない。

啓蒙主義において、結局問題にされたのは、結果(合理的に構成され、運営される社会)のみ。一方、批判理論家が受け入れた「全体性」は創造的個人、選択の自由を許された個人の行動から生まれる全体性。

個人の自立は、自立した社会以外では獲得しえない。

あらゆる機能が奪われた公共空間から個人の自由を探し求めていかねばならない。

■担当部分の論点と仮説■

その前に、

皆さんは、自分自身が「個人の自立」を獲得していると思いますか???

① 近代の「時間」「空間」の関係の変化とグローバリゼーションの関連性

移動手段の進歩、さらにはインターネットの普及により、時間は空間を完全に征服。

さらに、インターネットを通して、不特定多数の人々と交流できるように。

○【日本】

以前は、情報の伝達速度、進歩の速度は遅く、人々がそれを受け入れるのに、十分に考え、議論する時間があったが、今は次々に新しい情報が入り、その余裕がない。

→安易な「大衆化、大衆迎合政治」「均質化」に向かっているのでは???

○【発展途上国(特にアジア諸国)】

変化の流れがより速い。一足飛びに発展のプロセスをたどっている。

Ex. 中国 北京、上海での当局によるマナー教育。急激な生活の変化。

Ex. バングラデシュ(富裕層) 固定電話を飛び越え、インターネット、携帯電話へ。

自分の「国」にとってはどのように受容するのがベストなのかという思考の欠落。

グローバリゼーションのもとに、科学技術がその役割を考えられることなく、発展し、人々に受け入れられているが。。。

一度バブルがはじけると、極端な懐古主義が流行するのではないか。

② 「共同でものごとを決定する能力」の復活、集団的に挑戦する重要性

新卒選考にあたっての重視点 経団連調査

コミュニケーション能力 79.5%

協調性 53.0%

主体性 51.6%

チャレンジ精神 49.4%

誠実性 42.4%

責任感 33.0%

※英語力 4.4%

○詰め込み教育→総合的教育の見直しなど、流れは変わっている???しかし、それを公的空間のために活かそうとする意識は不足しているのでは。何か例があれば。

○仮に例があっても、それは一地域レベル。その地域でしか通用するものではなく、「面」として発展しうるものではない。さらに、仮に特定の地域が町おこし(仮)に成功しても、本来別のところに行くはずだった観光客が移動するだけなのではn???

③ 日本における自由とは???

戦後、国を発展させるという「目的」のために、新しいものを受け入れ、一心不乱に働いた。「一億総中産階級」

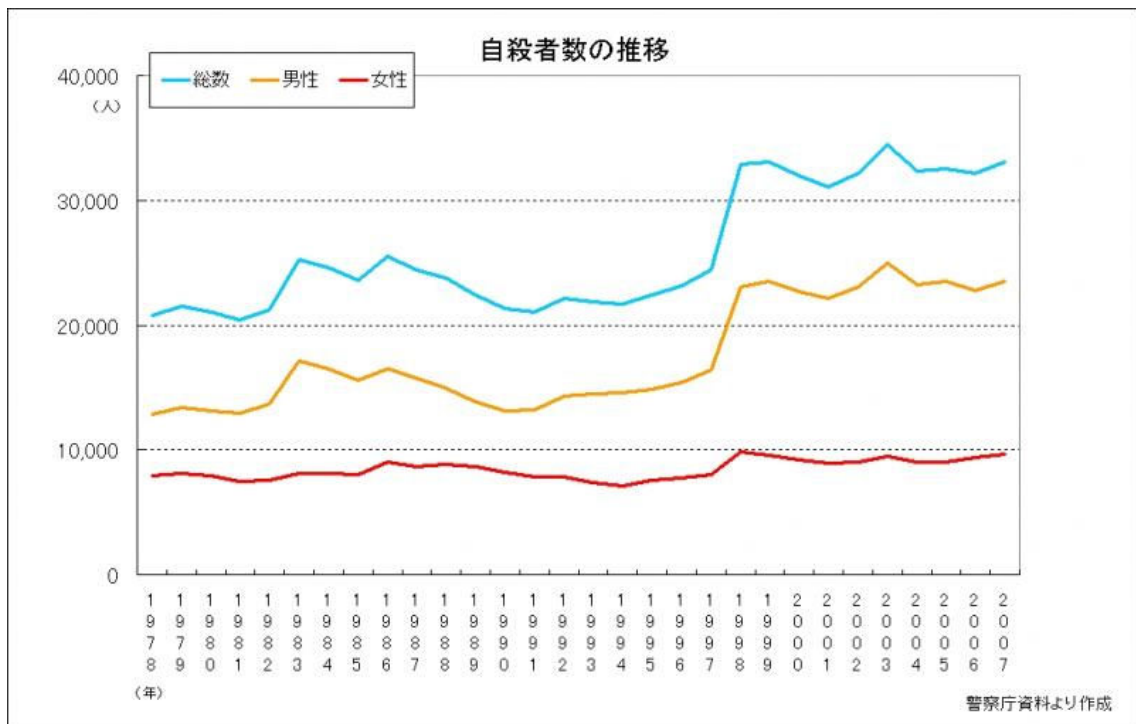
巨大な官僚制が支配し、構成員がそれぞれ組織の歯車になった。

『世界の日本人ジョーク集』早坂隆

- ・マルクスとケインズの論争
- ・海に飛び込むためには???

バブル崩壊後、「目的」がなくなった。

○自殺率の推移[98年に急増して3万人。そこから12年連続で3万人を超えた。]



④ 解放に関して(まとめ)

○昨年度のサークルのチームが掲げていたテーマ(理想社会)

「貧困が原因で自分の可能性が閉ざされてしまうことのない社会」

→要するに、自分のしたいこと、できることを知っており、それについて考え、それに向けて努力できる環境がある状態。(選択肢が多く、それにアクセスできる状態)

○バングラデシュの人の考え

皆がそのようなことを考え出したら、誰もリキシャドライバーなんてできないよー。

ただ、nothing→anythingになると、人々は一時的には大満足する。

○テーマへの反論

中途半端な「解放」「自由」はどうなのか???チャンスにあふれている社会は苦痛でもある。(努力しないで事実上の個人にはなりえない。→失敗した時の言い訳ができない。自分自身の身の置き場がない。)

要するに、何も知らずに「そこそこ」の生活ができればそれでいい。

○現段階での自身の意見

[先進国]

・周りに惑わされないようになることが重要。

そのために、

○積極的に海外(特に発展途上国)などに行き、様々な人々の生き方や考え方を知る。

○政治、自分たちのコミュニティに関して、コミュニティの人々の間で、がつつり議論する場を作ってみる。[古代ギリシア・ローマへの強制的回帰]

→うまくいけば、そのモデルは広まりうる。

←まずは友達になる。

[発展途上国]

・言葉で簡単にいえる「解放」「自由」に関して、常に懐疑的になること。真の自由を常に志向すること。

・物質的豊かさ=精神的豊かさではない。

←日本のバブル崩壊の例の二の轍を踏む国がありそうな気が。。